

課外企画を軸にした外国語教育の実践 —関西大学における非専攻ロシア語の取り組み—

小田桐 奈美

1. はじめに

近年、ロシア語教育を取り巻く環境は悪化の一途をたどっており、ロシア語学習機関数・学習者数ともに減少傾向にある。このような傾向には、主に①二国間の政治経済関係、②対露イメージ、③習得困難言語というイメージ、④文科省・各大学施策という4つの要因が影響を与えていると考えられ、特に②と③のイメージが原因で学習者増に結びつかず、そこに文科省や各大学のコスト削減圧力がかかり、課程数や教員数が削減されるという構造になっている(林田 2016:159)。

そのような環境の中で学ぶ学習者は、いかなる理由でロシア語を選択し、またロシア語学習に対してどのような意識を持っているのだろうか。2012年度に実施されたドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国・朝鮮語の学習者を対象とした大規模アンケート調査の結果¹、日本で第二外国語としてロシア語を学んでいる学生は、他の調査対象言語の学習者と比較しても、ロシアやロシア語そのものに興味を持ってロシア語を選択し、学習が好きで楽しいと感じる一方で、学習するコスト(難しさ、負担)を感じているという、2つの相反する特徴が明らかになった(宮本ほか 2014a;2014b)。

もちろん、アンケート調査の結果を詳細に見ていくと、大学や学部、個人差があることは当然であるが、当該調査で明らかになったロシア語学習者の傾向は、教員が日々の実践の中で抱く印象とも概ね一致しているといえよう。学生の興味・関心に応えつつ、コスト意識を取り除き、かつ学生にロシア語学習の達成感を味わってもらうことは可能なのだろうか。その試みの1つとして、関西大学(以下、関大とする)では、「語学は語楽」をコンセプトに、課外企画を軸にしたロシア語教育を展開している。

本稿では「課外企画」を広く捉え、「通常の教科書を用いた授業に加えて実施するイベント」と定義する。開催場所は学内外を問わず、通常の授業時間内を利用する場合もあれば、別途時間を設定する場合もある。企画当日に向けて授業時間の一部を準備にあてる場合や、当日の成果を学期末の成績評価に反映させる場合もある。

課外企画は、目標言語話者との交流など、ロシア語以外の外国語教育でも様々な取

¹ ロシア語の回答学生数は1,114名である。

り組みが見られる。特に、教室外で目標言語に触れる機会が少ない非専攻(第二)外国語教育の場合に、当該言語を実際に使用する貴重な機会として、極めて大きな意義を持つと考えられる。

日々の教育実践の中で課外企画をどの程度取り入れるかは、大学や個々の教員、また目標言語によって大きく異なるだろう。本稿は、課外企画を特に積極的に取り入れている事例として、関大におけるロシア語教育の実践を取り上げる。以下では、まず関大のロシア語教育の概要を述べる(第2章)。次に、関大が近年実施している課外企画のうちに、特に3例を詳細に取り上げ、各企画で見られた効果を明らかにする(第3章)。その上で、課外企画を軸にしたロシア語教育、ひいては外国語教育全体に共通する可能性と課題を指摘する(第4章)。

2. 関大におけるロシア語教育の概要

関大は大阪府に位置し、約3万名の学生を有する大規模私立大学である。北海道や日本海側地域と比較して、地理的にもロシア語・ロシア文化に触れる機会は極めて少ない。

メインキャンパスである千里山キャンパス(吹田市)における、新入生および2年次からの新規ロシア語履修者数は、近年200名弱で推移している。専攻ロシア語は無く、非専攻ロシア語のみ開講されている。あくまで授業運営上参考にする目的で実施しており、体系的なものではないが、記述式アンケートでロシア語を選択した理由を尋ねると、例年「ロシア語自体に興味があるから」という声も一定数聞かれる。また、「ロシア語を学べる大学は少ないと聞いたから」など、ロシア語の希少性を挙げる学生も見られる。

卒業に必要な外国語の単位数は学部ごとに異なり、第一外国語と第二外国語が8単位ずつの学部もあれば、学生の選択次第では英語のみで外国語科目の卒業要件を満たせる学部もある。制度上、ロシア語を第一外国語に指定し、英語よりもロシア語の方を多く履修することが可能な学部もあるが(例えばロシア語12単位、英語4単位)、実際にそのような選択をする学生はごく稀である。

高槻キャンパス(高槻市)に位置する総合情報学部は、かつて学内はもちろんのこと、全国的に見ても特色のある外国語カリキュラムを有しており、同学部ではそれを活かした独自のロシア語教育が実践されていた。ロシア語が非専攻言語である点は、メインキャンパスの他学部と変わり無いが、12単位の主選択と4単位の副選択を履修するカリキュラムで、ロシア語を主選択として学ぶことが可能であった。

当該学部におけるロシア語教育の実践報告である北岡(2009:65-67)では、28名を

対象としたアンケートの結果、「ガイダンスを見て楽しそうだった」というのが、ロシア語選択の主たる理由であることが明らかになっている。実際、主／副選択を決定するための入学時ガイダンスにおいて、過年度の授業の様子を記録した写真や映像を紹介するなど、ロシア語担当教員が工夫した結果、特に 2007 年度以降ロシア語を主選択として選ぶ学生は増加傾向にあった(北岡 2016:143)。また、英語に対する苦手意識がロシア語の選択理由となる場合や、学生自身がロシア語学習を「外国語学習に対する再挑戦」の機会として位置づけることで、ロシア語の試験結果にポジティブに反応する傾向が見られたことが明らかになっていた(北岡 2009:65-67;北岡・塩村 2013)。その点でも、当該学部における主選択としてのロシア語は、英語に苦手意識を持つ学生の受け皿となり、ロシア語学習を通して、英語を含めた外国語学習そのものへの苦手意識を取り除くという、極めて重要な役割を果たしていたといえる。だが、2015 年度の新カリキュラム導入により、第一外国語は英語のみ選択可能で(10 単位)、第二外国語としてドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、朝鮮語のうちから 1 言語(4 単位)選択する制度に変更された。

2016 年 11 月現在、全学レベルでのロシア語圏の協定校は 3 つあり(ロシアの太平洋国立大学およびアストラハン国立大学、キルギス共和国の中央アジア・アメリカ大学)、学期単位での交換留学が可能である。その他、約 1 ヶ月の夏季語学セミナーも提供されている(太平洋国立大学)。

外国語学部生を対象とした 2 年次全員必修の Study Abroad プログラムでは、2017 年度派遣学生より、前述の中央アジア・アメリカ大学が、「クロス留学」(主専攻言語である英語と、英語以外の言語の両方を学ぶプログラム)の選択肢に加わった。当該大学を選択した学生は、留学先で主専攻言語である英語と、ロシア語の両言語を学び、帰国後は副専攻言語としてロシア語の学習を継続する。

その他、筑波大学とキルギス日本センターが主催する夏季研修や、アストラハン国立大学が提供するカスピ・サマースクールなど、学外の短期研修に参加する学生や、ユーラシア協会等の制度を利用して 1 年程度留学する学生もいる。2015 年にはロシア語サークル「ヤーブラカ(りんご)」が立ち上がり、ロシア語・ロシア文化に関する活動を積極的に行っている²。

² その他、関大におけるロシア語教育の実践については、随時 Facebook ページ「関西大学ロシア語講座」等で発信している(<https://www.facebook.com/kandai20russia15/>)。

3. 関大における課外企画の実践

関大で近年実施(または参加)している課外企画を挙げると、以下の表 1 の通りである³。

表 1. 関大における近年の課外企画一覧

春学期	5月	ピロシキ・ワークショップ
	7月	プーシキン・リハーサル(学内朗読コンクール)
秋学期	10月	ロシア語圏留学トークイベント(留学体験報告会)
	3月	高大連携セミナー(ロシアを含むユーラシア圏の言語・文化に関するミニ講義や、マトリョーシカの絵付けなど)
不定期		キャリアとコミュニケーション(OBによる講演会) ビデオレター交流(アストラハン国立大学の日本語学習者) ロシア料理ワークショップ(ロシア語サークル「ヤーブラカ」との共同開催)
学外行事への参加	11月	関西ロシア語コンクール
	12月	在大阪ロシア総領事館主催「ロシア語のタベ」
	不定期	関大生を対象とした、総領事館によるロシア料理ワークショップ

本稿では、上記のうち①ピロシキ・ワークショップ、②プーシキン・リハーサル、③ロシア語圏留学トークイベントの 3 例を中心に、以下の各節で詳しく取り上げる。

3.1 ピロシキ・ワークショップ

当該企画は、「食」を通してロシア語・ロシア文化への理解を深めることを目的とし、2003 年度から毎年 5 月中旬に実施しているもので、2016 年度で第 14 回目を数えた。ピロシキを包み終えた後に、ロシア語による会話をクリアすることで、ピロシキを揚げてもらえるルールを導入している。4 月にキリル文字の学習から始めたばかりの 1 年生にとっては、ちょうど1ヶ月程度経過し、文字や発音規則、簡単な会話表現などを身に付けた時期である。このイベントは、学習の初期段階でロシア語を使う実践の場であると同時に、ロシア語会話をクリアするとピロシキが揚げられるという明確なゴールを設定することで、学習に困難を感じつつある学生を支援する場として位置づけている。

学生が暗唱するのは、以下の表 2 の「学生」の部分で、数字や挨拶、依頼の表現(下

³ 関大における課外企画は、特に 2003 年度以降積極的に実施されるようになった。筆者が着任した 2013 年度以前の実践については、近藤(2007;2009)を参照のこと。毎年度末に開催している講師懇談会や、関大ロシア語教員のメーリングリスト上で、新規企画が提案されることもしばしばある。

線部)が含まれている。

表 2. ピロシキ・ワークショップのロシア語対話

	ロシア語	日本語訳
学生:	<u>Здравствуйте!</u>	<u>こんにちは!</u>
先生:	Здравствуйте!	こんにちは!
学生:	<u>Меня зовут Ханако.</u>	<u>私の名前は花子です。</u>
	<u>А как вас зовут?</u>	<u>あなたのお名前は何ですか。</u>
先生:	Меня зовут Саша. Очень приятно.	私の名前はサーシャです。 どうぞよろしく。
学生:	<u>Очень приятно.</u>	<u>どうぞよろしく。</u>
先生:	Вы любите пирожки? Вам нравятся пирожки?	あなたはピロシキが好きですか。 ピロシキが気に入っていますか。
学生:	Да, конечно. <u>Можно жарить пирожки?</u>	はい、もちろんです。 ピロシキを揚げてもいいですか。
先生:	Сколько?	いくつですか。
学生:	<u>Один, два, три, четыре, пять,</u> <u>шесть, семь, восемь, девять,</u> <u>десять...</u> <u>Десять пожалуйста!</u>	<u>1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10...</u> <u>10 個お願いします!</u>
先生:	Не надо.	ダメです。
学生:	<u>Пять пожалуйста!</u>	<u>5 個お願いします!</u>
先生:	Нельзя.	ダメです。
学生:	<u>Три пожалуйста!</u>	<u>3 個お願いします!</u>
先生:	Хорошо, пожалуйста.	いいですよ、どうぞ。
学生:	<u>Спасибо.</u>	<u>ありがとうございます。</u>
先生:	Пожалуйста.	どういたしまして。

この対話には、教科書では秋学期以降に学習する項目も含まれているが、5 月時点ではまとまった会話表現として覚えている。

当該イベントでは、学部や学年を超えた交流が生まれている。上級生は「先生役」をサポートするほか、ピロシキの作り方をロシア語で説明する寸劇や、ビンゴ、漫才、クイズといったミニ・イベントも企画している。学生にとっては、教室とは異なる状況で、授業の担当教員とコミュニケーションを取る機会であり、普段は接点がない他学部の学生や上級生、また他のロシア語教員と出会う機会でもある。教員にとっても、教員同士で顔を合わせて情報交換する場となっている。例年 OB の参加もあるほか、2016 年度には、関大の協定校である中央アジア・アメリカ大学(キルギス共和国)からの留学生第一号が参加し、学生たちとロシア語で交流した。ピロシキ・ワークショップについては、外国語選択のために新入生全員に配布する冊子「ことばの旅」でも大きく取り上げており、こ

のイベント自体がロシア語を選択する動機になっていることもある。

3.2 プーシキン・リハーサル

この企画は、2006 年度から毎年 7 月中旬に実施している詩の朗読コンクールで、2016 年度で 11 回目を数えた。ロシアの国民的詩人である、アレクサンドル・プーシキンの名前を冠しており、規定部門と自由部門に分かれる。

規定部門では、プーシキンの詩を暗唱する。以下は、1 年生用の課題詩「僕はあなたを愛していました」である。

Я вас любил: любовь ещё, быть может,
В душе моей угасла не совсем;
Но пусть она вас больше не тревожит;
Я не хочу печалить вас ничём.
Я любил безмолвно, безнадежно,
То робостью, то ревностью томим;
Я вас любил так искренно, так нежно,
Как дай вам бог любимой быть другим.

僕はあなたを愛していました。愛はまだ、たぶん、僕の心の中で完全には消えていないけど。これ以上僕の思いがあなたの心を乱さないように。僕は決してあなたを悲しませたくないのです。僕はあなたを愛していました、ひそかに希望もなく、臆病に、嫉妬に悩まされながら。僕はあなたを愛していました、心から、優しく、あなたが他の人に愛されますようにと願うほど。

この作品は、ロシア語学習を始めて約 3 ヶ月半の学習者にとって、文法や語彙の観点からはもちろん難易度が高い。だが、韻文の暗唱を通して、ロシア語のアクセントやイントネーション、リズムの習得を目指している。

自由部門では、学生が自由にテーマを選ぶことができ、例年ロシア語の歌や物語の朗読、劇など、多彩なプログラムが見られる。音楽(ピアノ、チェロ、ドラム、ボイスパーカッションなど)やダンス、イラストなど、学生は自分の得意分野を活かして発表している。教員にとっても、またクラスメートにとっても、普段の授業では見ることのできない、学生の意外な側面を発見する機会になっている⁴。

当該コンクールでは、各部門で 1~3 位、場合によっては特別賞を授与している。上位者から順番に、ずらりと並べられた賞品(主にロシア雑貨)の中から好きなものを選んでいく。参加した全ての学生が達成感を味わうことができるよう、残りの賞品は惜しくも入賞を逃した学生のための参加賞としている。

2014 年度より、在大阪ロシア連邦総領事館より特別審査員(領事参事官や文化担当

⁴ 2016 年度は英語教員の参加もあり、普段の英語の授業では見られない、学生の新たな一面が発見できたと好評であった。

アタッシェ)を招き、総領事館賞を授与していただいている。他大学の教員や学生の見学も受け付けている。2016年度は他大学のロシア語学科の学生が、関大生と一緒に自由部門に出場し、「友情賞」を受賞した。

3.3 ロシア語圏留学トークイベントと「めやす」プロジェクト

「ロシア語圏留学トークイベント」(以下留学トークイベントとする)は、学内外の各種研修プログラムを利用してロシア語圏に滞在した学生に、その経験について報告してもらうもので、2014年度から実施している。

筆者は2015年度、公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)主催の「めやすマスター研修」に参加した。この研修は、外国語学習の指針である「外国語学習のめやす」(公益財団法人国際文化フォーラム編 2013)の普及を目的として、2013～2015年度に実施されたものである。1年に2回の合宿形式で行われ、8言語の教員が一堂に会し、「外国語学習のめやす」(以下「めやす」とする)の詳細について学ぶとともに、「めやす」に基づいた授業プランの立案・実践・報告を行った。筆者はこの研修を通して、「ロシア語圏へ行ったつもりで旅行体験報告をしよう!」という、ロシア語圏の各地域で一週間のグループ旅行をしてきたつもりで、現地での体験についてロシア語で口頭発表するというプロジェクトを立案した⁵。実践にあたっては、「めやす」プロジェクトの対象となるクラスを1つ選び(2年生15名)、既存の課外企画である留学トークイベントを活用することにした。

3.3.1 ロシア語圏留学トークイベント

2回目の2015年度は、ロシアのモスクワ、ハバロフスク、アストラハン、およびキルギス共和国に滞在した学生の発表があった。各グループ10分程度で、発表内容は以下の通りである。

- ・留学(研修)先・期間
- ・プログラムの提供・斡旋先
- ・プログラムの内容
- ・現地の様子

⁵ プロジェクトの詳細な内容や評価基準などは、TJFの「めやすWeb」で公開されている(<http://www.tjf.or.jp/meyasu/support/writer/odagiri/post-93.php> [2016年11月30日最終閲覧])。

- ・プログラムへの参加前後で、自身にどのような変化が見られたか(語学力、ロシア語学習動機、考え方など)
- ・その他自由

本イベントは、「めやす」プロジェクトの対象クラスの授業時間を用いて、普段と異なる教室で行ったものだが、関心のある学生や、他のロシア語教員、またロシア語圏の研修を担当している職員などの参加も受け付けた。

対象クラスの学生については、留学トークイベントを通して、各地域に関する予備的な情報を得るとともに、短期語学研修や長期留学を通して得られる経験について学ぶことを目的にした。ワークシートを配布し、各グループの発表内容の要点を記録するよう指示した上で、感想を記入してもらった。学生の感想からは、関大で同じくロシア語を学ぶ他の学生の発表から、多いに刺激を受けたことがわかる(例:「とても皆さんイキイキしていて楽しい体験をしてきたのが伝わってきて私もなんだか楽しくなりました。」「(印象的な発表をした学生に対して)やっぱり4人目の人がすごいです。」「とても魅力のあるプレゼンで聞きほれていました。みんなロシアでの留学が本当に楽しかったんだなあと伝わってきました。」)。

また、ロシア国内およびロシア語圏内の多様性に気づいてもらうことも、このイベントのねらいだったが、一部の学生についてはそれが達成されたことが確認できた(例:「同じロシア語圏でも地域で色んな違いがあり、おもしろかった。」「同じロシアでも土地によって雰囲気や建物の特徴が異なるなと感じました。同じロシア語を使用していても西欧の文化が多くを占めるロシアと中央アジアのキルギスで文化の差が見られおもしろかったです。」)。

3.3.2 「めやす」プロジェクト

本プロジェクトの実施にあたって設定した目標は、以下の通りである。

関大が提供する短期語学研修・交換留学プログラム、及び学外のプログラムを通して訪問できるロシア語圏の地域について、観光名所、気候、文化、食べ物、おみやげなど、様々な観点から理解を深める。それらの地域への短期旅行プランを作成し、行ったつもりで旅行体験報告を口頭で行うことができる。

また、評価対象にはならないが、旅行プランの作成および架空の旅行体験報告を通して、自分がそれらの地域を訪問するイメージを具体的に描くことによって、将来的な

短期語学研修への参加や長期留学へのモチベーション向上につなげることも目的にした。

留学トークイベント終了後、クラスを4つのグループに分け、担当する国・地域を決定した後、各自ガイドブックやインターネットを用いて、担当する国・地域に関する情報を収集した。筆者が作成した「発表準備シート」と「発表のためのロシア語表現集」⁶を配布し、発表で用いるロシア語の定型表現を学び、各グループで役割分担の上、互いに協力しながら発表原稿を作成した。その後パワーポイントを用いて、現地の写真を交えながらスライドを作成した。

各グループの発表終了後、一番行ってみたい地域に投票してもらうことで、学生同士でフィードバックしあう機会を設けた。また、発表会にはロシア語圏への留学経験者や他のロシア語教員も招待し、コメントをもらうとともに、発表で取り上げられなかった点を中心に、現地に関する補足情報を提供してもらった。

口頭発表は、発表内容、スライドの構成、役割分担、時間管理(以上、グループ全体としての評価)、ロシア語の表現・理解しやすさ、アイコンタクト(以上、個人の評価)などの観点から、事前に学生にも配布したループリックに基づいて評価し、秋学期評価の25%として計上した。

プロジェクトの対象クラスは、第二外国語としてロシア語を学んで2年目の初級レベルだが、工夫次第で十分口頭発表ができることを実感してほしいと考えたことも、本プロジェクトを立案する上での発想の原点の1つであった。学期末に実施したアンケート⁷では、学生が口頭発表を通して達成感を味わっていたことが確認できた(例:「ロシア語でプレゼンするという話が出た時、正直自分には無理だと思っていました。しかし、皆で協力することで、それなりの物をつくることができたので、自信ができました。これからも続けていってほしいです。」)。また、口頭発表を貴重な機会として位置づけた学生も見られた(例:「人前で普段使い慣れないロシア語を話せる機会はほとんど無いので、良い経験になった。」)⁸。さらに、「めやす」プロジェクトを留学トークイベントという既存の課

⁶ 表現集の作成にあたっては、「大学生の外国語プレゼンテーション入門—基本スキルと8ヶ国語表現集」を基にした(<http://lang.flc.kyushu-u.ac.jp/presentation/materials/index.php> [2016年11月30日最終閲覧])。

⁷ 全学共通の記述式アンケート用紙を用い、通常の授業と「めやす」プロジェクトに関する部分を分けて記入してもらった。記入者は12名。

⁸ その他、学生のコメントからは、欠席の多い学生と、他のグループメンバーの両方をどのようにフォローすべきかが、重要な課題として浮き彫りになった(例:「チームワークとして自分の担当をしてこない人がいたので残念だった。」)。これは課外企画だけではなく、グループワークを積極的に取り入れる授業や、あらゆるプロジェクト型授業に共通する課題であろう。

外企画と連動させたことで、プロジェクト対象クラス内で完結せず、ロシア語学習者の間で学部・学年を超えた交流がもたらされたことも、大きな成果の1つだといえよう。

4. 課外活動を軸にした外国語教育の可能性と課題

このように、教室外で目標言語に触れる機会の少ない環境において、課外企画は目標言語を実際に使用する貴重な機会となり、学生はそこでの活動を通して達成感を味わっている。また、通常の授業内では出会う機会が無い人々と交流する場にもなっている。以下では、そういった効果が決してその場限りで終わるのではなく、課外企画が波及効果をもたらす場としての可能性を持っていることを指摘したい。

4.1 波及効果をもたらす場としての可能性

第一に、通常の授業への波及効果が挙げられる。どの課外企画も、学生に出来る限り難しさを感じさせずに、少し難易度の高い項目を先取りする仕組みとして機能している。例えば、ピロシキ・ワークショップでは数字や挨拶、依頼の表現を暗唱するが、後に同項目を教科書で改めて学ぶ際に、それらの表現がピロシキのロシア語対話に含まれていたことに気づかせることで、記憶を呼び戻しつつ、発展的な内容を定着させるきっかけになる。その際、学生自身が「あ、これ覚えてる！」と驚くこともある。プーシキン・リハーサルで暗唱する詩は、後に教科書で動詞の過去形や格変化(特に対格)を学ぶ際にも、同様に活用することができる。また、「めやす」プロジェクトの対象クラスでは、「教科書には出てこないような単語を調べて知ることができた」と、教科書の範囲を超える項目の学習を肯定的に捉える声も聞かれた。さらに、近藤(2007:241-242)は「実際ピロシキはその場限りかと思われたが、料理を介してロシアの文化に興味を持った、企画が楽しいので授業も楽しみだ、という声をよくきくようになった」と報告しており、課外企画での体験が、通常の授業へのモチベーション向上にもつながっている。

第二に、課外企画を通して生み出された「成果物」の循環による波及効果が指摘できる。発表の様子を撮影した映像などの「形が残る成果物」は、特に「めやす」の理念を取り入れた実践で重視されているものだが(山崎 2016:10)、課外企画を軸にした教育実践においては、その性質上、「形が残る成果物」を作りやすい。「成果物」は、特に次の学習者の視点から見て有益であり、ある年度や学期、単元を始める際に、上級生の成果として見せることによって、次の学習者にゴールのイメージを明確に植え付けるのに

役立つ⁹。留学トークイベントと「めやす」プロジェクトの実践にあたっては、留学経験者の発表を聞くことで、同プロジェクトの対象学生が大いに刺激を受けたことが確認できたが、今度は同プロジェクトを通して生み出された「成果物」が、次年度以降の学生に正の影響を与える可能性を秘めている。

ある課外企画のために作成した「成果物」が、学年や学部どころか、ロシアの日本語学習者を巻き込んで循環し、思わぬ波及効果をもたらした例もある。関大のあるクラスで、ロシア総領事館主催の行事のために作成した映像作品をインターネット上で公開したところ、ロシアのアストラハン大学の日本語教員の目に留まり、同大学の日本語学習者が同様の映像作品を作成した。その作品を鑑賞した関大生が、アストラハン大学の学生宛にロシア語で質問を送り、またその回答を受け取るなど、その後も交流が続いた。このような草の根レベルの交流が、その後大学間の交流にも発展し、2016年には学生交換協定を締結するに至った。このように、一つの「成果物」をきっかけに、学年や学部、大学、そして国や地域を超えて学生同士が交流する場がもたらされたのである。

4.2 課題とその対策案

課外企画を軸にした教育を実践する上では、どのような課題があるだろうか。

第一に、通常の授業時間外に行うタイプの課外企画の宿命かもしれないが、学生の予定(他の授業やアルバイトなど)との兼ね合いで、必ずしも全ての学生を巻き込むことができない点である。例えば、土曜日にイベントを開催する際、通常のロシア語の授業自体も土曜日に開講されている学部では、授業の一環として実施しやすいが、土曜日に授業が無い学生を呼び込むのはなかなか困難である。

2016年度より、春学期のプーシキン・リハーサルと同様の成果発表の場を秋学期にも設けるべく、12月中旬に映像作品およびプレゼンテーション・コンテスト(ヨールカ祭)を新たに開催する予定である。このイベントでは、万が一当日参加できない場合も、事前に映像作品を作って出品することを認めている。このような工夫により、学生を部分的にも巻き込むことが可能であると考えられる。

第二に、課外企画を軸にした外国語教育が、たとえ同じく非専攻(第二)外国語という条件だとしても、必ずしも全ての大学で有効だとは限らない点である。例えば、ロシア語教育に関する科研最終報告書である林田ほか(2016)では、様々な大学でのロシア語教育の実践が報告されているが、本稿と同様の課外企画の試みが大きな成果をもたら

⁹ 2015年度「めやす」マスター研修での、主任講師山崎直樹氏による講義資料より。

したという例もあれば、あまり効果が無かったという例も見られる。よって、本稿が明らかにした課外企画を軸にしたロシア語教育の効果は、関大生の特性や、その他の条件に依るところが大きい可能性も十分に考えられ、だからこそ課外企画が「関大らしさ」の創出につながっているともいえるのである。そのため、他の大学で課外企画を積極的に取り入れる際には、各大学の学生の特性を踏まえ、頻度や内容を調整することが求められるだろう¹⁰。

5. おわりに

このように、「語学は語楽」をコンセプトにした関大における課外企画では、まずはロシア料理を作ったり、歌って踊ったり、その場の「楽しさ」を全面的に肯定しており、それこそがロシア語教育実践における「関大らしさ」の核となっている。また、課外企画を軸にした外国語教育は、実践する上での様々な課題もありながら、決してその場限りではない、波及効果をもたらす場としての可能性を持っているのである。

本稿の冒頭で述べたように、ロシア語教育を取り巻く環境は悪化の一途をたどっており、多くの問題が山積している。そのような状況の中、履修者数やロシア関係企業への就職実績といった「数」で示すことが難しい、特に非専攻ロシア語教育の実践者に対しては、より効果的なロシア語教授法の開発だけでなく、ロシア語教育の必要性や意義についての説明が、時には必要以上に求められている。

今後、どのようなロシア語教育を展開していくべきなのだろうか。日々の試行錯誤の過程で、現時点での答えの1つとして関大で浮かび上がっているのが、課外企画を軸にしたロシア語教育である。もちろん、課外企画は万能ではないし、魔法のように全てを解決してくれるわけでもなく、これからも試行錯誤は続くだろう。だが、思考停止に陥ったり、現状にあぐらをかいたりする暇がないのは、ある意味幸せなことなのかもしれない。ロシア語教育を含め、非専攻(第二)外国語教育全体に対して何かと風当たりが強い状況を逆手に取り、むしろユニークで新しいアイデアが生み出される可能性が大いに期待されるのだと信じていたい。

(関西大学外国語学部)

¹⁰ もちろん、関大の中でも学部差や個人差があることは指摘しておかなければならない。実際、本稿の冒頭で取り上げた2012年度の大規模アンケート調査でも、学部系統によって、ロシア語学習者の動機づけに大きな差が見られることが明らかになっている(宮本ほか2014b:17)。

参考文献

- 公益財団法人国際文化フォーラム編(2013)『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』国際文化フォーラム.
- 北岡千夏(2009)「モチベーションをはぐくむ—関西大学ロシア語教室の挑戦」『関西大学外国語教育フォーラム』第8号, 63-76頁.
- _____ (2016)「関西大学総合情報学部のロシア語教育」『大学間・高等学校—大学間ロシア語教育ネットワークの確立』科研費研究成果最終報告書, 143-144頁.
- 北岡千夏・塩村尊(2013)「ロシア語学習者の初期動機づけ要因に関する考察—Rによるデータ解析」『関西大学外国語教育フォーラム』第12号, 17-30頁.
- 近藤昌夫(2007)「課外企画の展開と学習動機」『Slaviana』第22号, 236-242頁.
- _____ (2009)「語学と文化のコンプレクス—関西大学の教養ロシア語教育」『スラヴィアーナ』第1号(通算第23号), 31-37頁.
- 林田理恵(2016)「全国6言語アンケート調査にみるロシア語学習者の傾向」『大学間・高等学校—大学間ロシア語教育ネットワークの確立』科研費研究成果最終報告書, 159-167頁.
- 林田理恵ほか(2016)『大学間・高等学校—大学間ロシア語教育ネットワークの確立』科研費研究成果最終報告書.
- 宮本友介・横井幸子・林田理恵(2014a)「日本のロシア語学習者の動機づけについて—全国6言語アンケート調査結果から」『ロシア語教育研究』第5号, 1-12頁.
- _____ (2014b)「日本のロシア語学習者の動機づけについて—期待・価値理論に基づく考察」『ロシア語教育研究』第5号, 13-20頁.
- 山崎直樹(2016)「『外国語学習のめやす』マスター研修の成果」『What's「外国語学習のめやす」』公益財団法人国際文化フォーラム, 10-11頁.

*謝辞

まず、近藤昌夫先生をはじめ、関大でロシア語教育に携わっている全ての先生方に、心から感謝申し上げます。経験豊富な先生方に囲まれ、着任4年目の私が「関大らしさ」を実感しながら日々の教育活動に従事できるのは、本当にありがたいことです。また本稿には、2015年度「めやす」研修での講義やディスカッションの過程で着想を得たアイデアも多々含まれています。主催者であるTJFの皆さまをはじめとし、私が本研修に参加するきっかけを作ってくださいました方々、そして様々なアイデアや経験を惜しみなく共有してくださった講師や参加者の皆さまに、深く御礼申し上げます。

Extracurricular Events as Key in Language Teaching Practices: Russian Language Education at Kansai University

Nami ODAGIRI

In this study, the author explores the effectiveness of active implementation of extracurricular events in language teaching practices with a particular focus on teaching Russian as a second foreign language at Kansai University, Japan. After presenting the positive results of three extracurricular events at the university, the author further reveals the spillover effects of the events, namely, the impact on regular classes and the potential influence of the products created by students during the events on future students.